

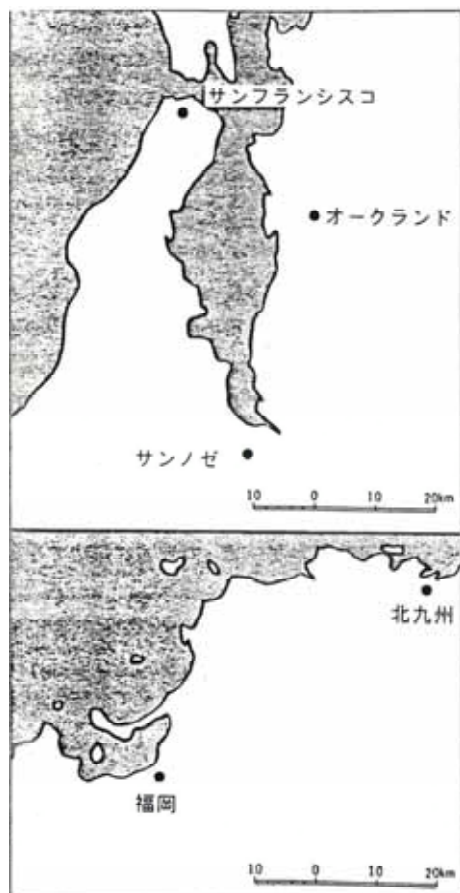
尾崎 正利

(よかネットNO.24 1996.11)

ゴールドラッシュからマルチメディアラッシュへ  
アメリカの西海岸カリフォルニアがゴールドラッシュに湧いたのは1849年のこと。それから150年近く経った今、カリフォルニアのシリコンバレーでは情報関連産業の発展が目覚ましく「マルチメディアラッシュ」という言葉が生まれている。

シリコンバレーの中心地はサンノゼ市（人口約76万人）。サンフランシスコ市との距離は約100kmで、2都市の間の谷間が連なるエリアに年間1億ドル以上の収益をあげる企業が実に120社以上ある。しかも、その大半は技術やシステムに独自の特色をもつ中堅企業で、この10～20年の間に急速に成長したものである。

今、世界中の注目を集めているシリコンバレー



図表1 シリコンバレー一帯と九州北部エリアの比較

を訪問する機会があったので報告致します。

チャンスがあればすぐに企業を起こす起業家精神「現代の二都物語」（アナリー・サクセニアン著、大前研一訳、絶版）をはじめ、シリコンバレーの成長の原因や過程について取り扱った本は多い。いずれもこの地域の「起業家精神」に触れている。ここで成功した企業の中には、20～30代の若い起業家が自分の発明品や技術をもってベンチャービジネスを起こしたり、企業の技術者がスピンアウトして独立するなど「個人が自分のやりたいことを実現するため」に起こして成功を治めた企業が数多くある。

シリコンバレーの中心地に近いパロ・アルト市の住宅地の中に、今やコンピューター産業の大手となったヒューレット・パッカード社の発祥の地が今も保存されており、カリフォルニア州指定の観光史跡になっている。日本から視察に来たビジネスマンがよく立ち寄りというが、下宿のちっぴけなガレージでスタートした小さな会社は、ヒューレットとパッカードという2人のスタンフォード大学の大学院生が、自分の担当教官であった当時の工学部長フレッド・ターマン教授から励まされて数百ドルを借り、1937年に創立したものだ。

1940～1950年代頃の初期のシリコンバレーで見られたような、大学の研究者や既に成功した企業が、新参者に対して研究室や資金を貸したりしてサポートする関係は今でも息づいている。例えばサン・マイクロシステムズという大手コンピューター会社があるが、サンのsunは「太陽」ではなく「スタンフォード・ユニバーシティ・ネットワーク」の略であって、もともと大学の研究室で生んだ発明品を外に持ち出して事業化に成功したものだ。それを大学のつながりを生かして成功している。

日本でも松下幸之助氏の起業精神などは有名であり、近年でも大手の企業を中心に企業内ベンチャーなどが奨励されるようになったが、最近の成

功例がゴロゴロしており、人の動きが活発な地域では（圧倒的に失敗するケースの方が多いのだが）当然ながら地域産業全体に活気がある。

冒険して失敗しても何度でもチャレンジできる風土シリコンバレーのベンチャーキャピタリストは「1割」の確立で当たれば上等と考えているという。当然、1割という高い確率は、的確な事業計画や技術的な発展性、市場優位性など、厳しい審査をパスしたベンチャー企業のみにも融資が与えられるためでもあるのだが、現地に在住している日本人技術者の話では「ここでは、ベンチャーで失敗しても何度でもやり直していい。大学に戻って技術を身につけて再びベンチャーで挑戦すればいいし、大体、成功した人は失敗した人よりも、より多く失敗しているのだから」という。

現在シリコンバレーでメジャーなIC？

現在、シリコンバレーで「IC」というと、集積回路のことではなく、Indian（インド人）とChinese（中国人）を指すそうである。ビジネスの世界に食い込もうとする若手研究者の中に、彼らの姿が圧倒的に多いようである。民間企業の社内食堂はカフェテリア方式になっているのだが、どの会社でも中華料理（麺類や炒め物など）、インド料理（カレーや揚げ物など）のコーナーが一番人気があった。

最近では旧東側諸国で軍事研究などに従事していた優秀な研究者が、シリコンバレーに多く流入しており、彼らも自分たちの独自のネットワークをもって起業化に挑戦し、成功している人も多いという。

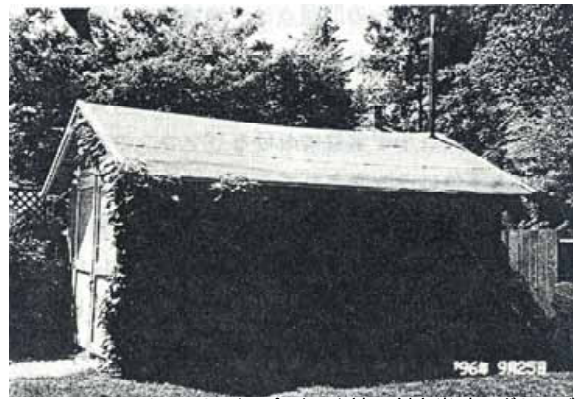
我々、九州人はアジアに向かって開かれた九州とかよく言っているが、実際に一番人が集まるのは、金と情報と産業が集まるところだなということを実感した。

プリミティブな動機が活力の原点に

普通の人であれば「少しでも金持ちになりたい」「成功者になりたい」という欲をもっているだろう。

シリコンバレーでは、成功した人が成功者としての生活を満喫しながら、目標をもった仕事に励んでおり、若い挑戦者にとって、目標が非常に分かりやすいのだ。

この成功者には、一稼ぎしたあとは引退してのんびりするという思いはない。自分が起こした



ヒューレット・パッカード社の創立当時のガレージ

会社が安定すれば、すぐに新しい分野の会社を立ち上げていく。

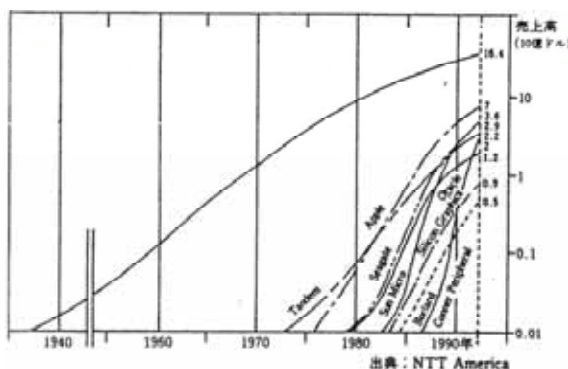
シリコンバレーの技術者の一企業での平均在職年数は5年くらいともいわれるが、実力ある技術者が持っている個人の人的ネットワークは、会社という枠を越えて結びついている。

研究者や技術者が自分の能力で、のし上がることができる希望こそが、大学や会社という所属に関係なく、若い人たちのチャレンジ精神の原動力になっている。日本の大学が、文科系、理科系を問わず今後どうやって若い人を引きつけていくのか、あるいは逆に彼らが積極的に動く原動力は何なのか、考えておく価値はあると思う。

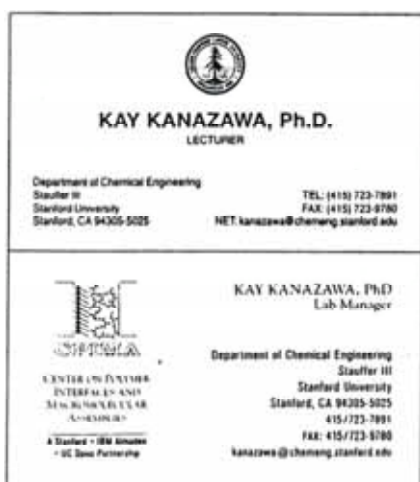
最先端技術とマネジメントの両立を早くから学べるシリコンバレーといえばスタンフォード大学が有名であるが、実際には公立・私立の数校の大学があって、いずれも電子工学やビジネススクール、有機化学などの特徴を生かして地域産業と結びついている。

大学の研究者が外で会社をつくるのが認められているため（特にスタンフォードでは研究者の外部活動を積極的に奨励している）、研究生や大学院生が自分の教官の手伝いをしながら、給料と実社会のビジネスを体験できる。これが卒業したあとの会社起こしに非常に役に立つそうである。生身のビジネスと、先端技術の両立は日本では、国公立大学の場合、公務員法の規定などの問題があってなかなかクリアできないでいる。

近年、日本の大学では教官を外部の民間企業などから呼び込んで活性化を図ろうとする動きはあるが、今後は研究成果を地域の社会へ還元するというベクトルが必要ではなからうか。



図表2  
シリコンバレーコンピュータ関連企業別売上高の年次推移



スタンフォード大学の研究者の名刺  
彼はIBMアルマデン・リサーチセンターの研究者でもあり、自分で起こした会社の名刺も持っていた(上:リサーチセンターの名刺、下:会社の名刺)

#### 地域の経済とコミュニティの新しい関係づくり

現在のシリコンバレーの問題点は、地域社会を巻き込んだ産業づくりといわれる。例えば、この地域のホワイトカラー労働者の賃金は全米でトップクラスという。しかし一方で、小中学校におけるパソコンの普及率は全米でも下位にランクされており、地域によっては軽犯罪の発生率が高く貧困層もいるなど、経済発展や産業技術とコミュニティの発展がアンバランスになっている。全米で1年間に投下されるベンチャーキャピタルの40%をこの地域が吸収して過熱気味であること、地価の上昇率が非常に高く、戸建住宅は50~100百万円前後することなど、ハイテクバブルを懸念する声も出始めている。

このため、経済活動とコミュニティ(地域の教育や住宅、生活環境)の相互作用によって、地域の継続的発展につなげようとする、シビック・アントレプレナー(市民起業家)という人々の役割

が重視されている。

商売で成功した人が、経済と地域コミュニティの橋渡しをすることをきっかけに、地域社会の教育(小中学校や労働者に対する)や生活環境、住みやすさを地域全体の問題として大事にしようというわけである。

この考えはジョイントベンチャー:シリコンバレー・ネットワーク(以下JV:SVNとする)という非営利法人組織で生み出された考えで、地域コミュニティの改善を含めた産業モデルの構築を目指そうとしている。現在は電子コミュニティや経済規制緩和、環境問題などを扱った11のプロジェクトが進行中であり、地域住民によるボランティアも盛んに行われている。

「貧しい地区の学校にPCを導入してネットワークでつなぎ、図書館と学校にインターネットを入れて地域福祉に役立てるべきだ」とある技術者が語ったように、大手の会社が古いモデルのコンピューターを寄付したり、コンピューター普及デーの日に全く商売気なしで地域の子供たちにレッスンをするなど、技術者達のボランティアへの取り組みも活発である。そういう訳でカリフォルニア州の8千の学校のうち、現在1千校以上まで導入が済んでいる。

このことは、いずれはコンピューターネットワークの普及に繋がって、長期的にビジネスにつながっていく地元産業界の市場戦略ともとれるが、面白かったのは日本のある新聞社が普及デー取材したときの話で、「このイベントでどうやってカネをもうけたのか?」と聞くので、担当者がジョークで「Tシャツを渡したのだ」と応えると(イベントの際に各参加企業が無料で配った)、記者が本気に受け取って「シリコンバレーのコンピューター会社は今やTシャツで儲けている」という記事を日本に出したということだ。

この日本でもこのJV:SVNに触発されて、

株スマートバレー・ジャパンの発会式があつて注目されているが、アメリカ流のやり方をそのまま持ち込むのではなく、この国にあった活動を進めていくことに今後注目したい。

日本の若者はもっと頑張らねばと素直に思った

今回の視察旅行で、最も印象的であつたのは20～30代の若者の意欲的な活動がシリコンバレーを支えている姿である。この60年間、シリコンバレーでは若い人が産業の原動力になっている。今回、訪問した研究所や民間企業でも、将来の金の卵ともいえる人々が多くみられた。若い人が実際にチャンスを見つけて果敢に挑戦していく、気っぶのよさに対して邪推抜きに感服する一方で、遙か離れたカリフォルニアの空の下、私は、故国・日本の行く末のことが少し心配になった。私自身は今年26才（フケているので、ひどい人は40才位にみてくださる）にもなるのだが、独立とか自立というものを改めて意識して生きないと「後悔する」と思った。日本では「が悪い」といって他人転嫁のその場しのぎで物事を解決してしまいがちであるが、自分の実力で解決していくことを若い人がやっていかないと日本の将来は暗い。

なお、誌面にて失礼しますが、今回の視察でいろいろお世話になった科学ジャーナリストの飯沼和正氏、九州大学の大城桂作教授、松田泰治助教授、現地で丁寧な案内をして戴いたIBMアルマデン・リサーチ・センターの関元氏の各氏に改めてお礼申し上げます。